

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	2019年度
氏名	砥綿 敬史	指導教員 (主査)	立石 雅子

論文題目	<b>口形の観察が失語症者の喚語に与える影響</b>
------	----------------------------

### 本文概要

【はじめに】失語症の喚語障害に対し、ミラーニューロンシステムに基づき、口形の観察を訓練に用いた報告は散見される。しかし、口形観察のキューとしての有効性やその特性について検討された報告は見られない。

【目的】口形の観察を喚語困難時のキューとして用いて、口形キューが失語症のある方(以下、失語症者)の喚語を促進するかどうか、また口形キューのもつ特性について検討した。

【方法】9名の失語症者を対象に、課題語の親密度と語頭音の口形の視認性を統制した呼称課題を実施した。語頭音の口形、課題語全体の口形、語頭音、課題語全体を喚語できない場合のキューとして段階的に提示し、どのキューで正答に至ったかを点数化した。また、標準失語症検査、標準失語症検査補助テスト(呼称のみ)、日本版レーヴン色彩マトリクス検査、Trail Making Test 日本版 Part A を実施し、口形キューの有効率との関係性を検討した。

【結果】口形キューは語頭音のみであると約9%、語全体を含めると約25%の割合で喚語を促進した。親密度の高い課題語では呼称に必要なキューは少ない傾向を示し、語頭音の口形の視認性については口形が視認しやすい語で呼称に必要なキューは増加した。

【考察】口形キューの観察では、読唇の情報のみではなく、ミラーニューロンシステムによるブローカ野近傍の賦活が喚語を促進させる可能性も考えられた。口形キューに影響を及ぼす要因として失語症の重症度や喚語力が抽出されたが、対象のばらつきも大きく、今後、口形キュー提示時のMEGやfMRIを用いた大脳の賦活の確認を含め、症例数を増やして検討を継続する必要があると考えられた。